

えんぶり

《出典：「八戸観光コンベンション協会」ホームページ》

《出典：「まちの駅八戸」ホームページ》

八戸地方を代表する民俗芸能で、約八百年の伝統を誇り、国の重要無形民俗文化財に指定されており、毎年2月17日から4日間にわたり市ならびに周辺の農村で行われる豊年祈願のお祭りで、青森冬の三大まつり、みちのく五大雪まつりに数えられています。

えんぶりは、その年の豊作を祈願するための舞で、太夫と呼ばれる舞手が馬の頭を象った華やかな烏帽子を被り、頭を大きく振る独特の舞が大きな特徴です。

その舞は、稲作の一連の動作である、種まきや田植えなどの動作を表現したものです。

「えんぶり」の名は、むかし「えぶり（杵）」という農具を手を持って舞ったことに由来すると伝えられ、それがなまって「えんぶり」となったらしい。

また、えんぶり摺りの合間の子供達による可愛らしい祝福芸も、見る者を楽しませてくれます。

1 えんぶりの起源

伝説も含め様々な説があるが、南部氏の太祖・南部光行公が奥州下向したころに始まったというのが通説である。

【通説】

鎌倉時代の始め、後の八戸八戸藩主南部光行は、頼朝から奥州糠部郡を拝領し、甲州（今の山梨県）から当国へ下ってきた。

奥州で迎える初めての正月、光行は自分の家来達に武装させ、有力者たちの家を訪問させたが、酒の勢いのためか家来達は抜刀乱舞したため、家人たちは恐れ慄いた。

このとき、その場に居合わせた農民藤九郎という機転の利く男が、賑やかに田植歌を歌い、農具を手を持って踊ったところ、家来達は刀を納めてその様子を見物した。

鳴子板をふり、田んぼの土をならす仕種を踊り終えた藤九郎が、南部家を祝福する口上を述べたところ、それが吉例となり、えんぶりが行われるようになったという。

2 えんぶりの種類

【ながえんぶり】

「ごいわいえんぶり」や「キロキロ」とも呼ばれ、うたや仕草がゆっくりしており、優雅な舞である。

主役を務める太夫（藤九郎と呼ばれる）の烏帽子に真っ赤な牡丹の花をつけている。そして鍬台（カンダイ＝田畑を耕す鋤の柄）を手をしている。

【どうさいえんぶり】

ながえんぶりとは逆に「どうさいえんぶり」はうたも仕草もテンポが速く、勇壮活発なえんぶりである。

うたの途中に「ドウサイ」という掛け声が入るのも特徴である。

見た目の違いは、烏帽子にマエガミと呼ばれる五色の房が垂れており、手にはジャンギという棒の先に金具のついたものを持っている。



ながえんぶりの行列



どうさいえんぶりの舞い

3 えんぶり組の構成

えんぶりは組単位で行われ、「太夫」と呼ばれる舞い手が3人あるいは5人と、笛、太鼓、手平鉦（てびらがね）、歌い手など総勢15~30人で構成されている。

【親方】

組の代表格。組を統率する。

【太夫】

えんぶりの主役、えんぶりの舞い手たちのことである。三人もしくは五人でなり、先頭にたつ太夫を「藤九郎」と呼ぶ。なぜ藤九郎と呼ぶのかは起源同様様々な説がある。最後の太夫をクロドメと呼び、それ以外の太夫は中の太夫と呼ばれる。

【お囃子】

太鼓、笛、手平鉦、歌い手、太鼓持ちなどからなる。

4 えんぶりの舞

摺る【す - る】

えんぶりを舞うことを「えんぶり摺（す）り」「えんぶりを摺（す）る」と言うが、これは「えぶり」と呼ばれる農具を使って田んぼの土を平らにならすことを摺る（する）ということから、農具を持って舞うえんぶりのことも「摺る」と言うようになった。

太夫は馬の頭をかたどった烏帽子（えぼし）をかぶり、黒いはっぴのようなものを羽織り、農具を模した棒を手に、足にはワラでできたツマゴを履く。

その足で大地をしっかりと踏みしめて、頭を振る。時には中腰になって地面すれすれまで頭を振り、一心不乱に舞う。

「えんぶり」という言葉は動詞の「イブリ（揺り）」に通じ、大地を揺さぶる、揺さぶり起こす、かき混ぜる、等の意味がこめられている。その時、太夫の烏帽子には神が降臨すると信じられていた。

種まきから稲刈りまでの稲作を、一つのストーリーとして表現したもの

えんぶり摺りの一連の流れは次のとおりである。うち「摺りはじめ」「中の摺り」「摺り納め」の三演目が主な神事儀礼的な演技として行われる。

「摺り込み」

先頭の太夫が口上を述べ、扇とジャンギを額に当てて入場してくること。

「摺りはじめ」

最初の摺り。年の初めの祝い歌にはじまり、種まき、田んぼの代掻きを表している。

「中の摺り」

苗取りのうたに、田植えの踊りを舞う。

「摺り納め」

稲刈りが終わりクラに俵を積む場面を表す。

これら三演目の合間には、「松の舞」「えびす舞」「えんこえんこ」「大黒舞」などの祝福芸が行われるほか、最後に、大事な 畦（クロ）から水が漏れないようにと、呪文の言葉を唱える「畦留め（クロドメ）」で、えんぶりは終わる。



5 えんぶりの演目・所作

【摺りこみ】

先頭の藤九郎役が、威勢よくえんぶり摺りの藤九郎が参りましたァ〜と口上を述べ終わると、右手にはジャンギまたはナリゴ・カンダイを持ち、音を立てながら左手に閉じた扇子を手拭いで包むように持って、額にかざし、一列に演ずる場所に入って一回りする。

【摺りはじめ】

太夫たちは、内側を向いて円形となり、ジャンギを寄せ合うようにしながら、振るわせ、

音を出す。

囃子が止まり、摺りの歌が始まるとえんぶり摺りが始まる。

どうさいえんぶりは全員が同じ所作をする。まず、ジャンギで一度地上を突くと、両足を開いてかがんだ姿勢から右足で土をけるようにして、烏帽子を大仰に振る。同じように外側を向いて烏帽子を大仰に振る。センスは開いており、大きく上に振りかざす。摺りの間、太夫全員の所作を合わせるようにジャンギで土を突く。

一方、ながえんぶりは、藤九郎役の太夫とその他の太夫とは所作が異なる。はじめは円形となり、内側を向き両手を伸ばし、足は大の字に開き歌に合わせて右、左と向ける。左手は斜めに耳元に持っていく。藤九郎は体を前にかがめるようにしながら、烏帽子を左右に大きく振り回す。

【中の摺り】

摺りの歌の詞章は違うが、基本的には摺りはじめと同じである。

【摺りおさめ】

基本的な所作は摺りはじめや中の摺りと同じであるが、最後になると、一列に並んで終わる。

【クロドメ】

摺り終わると、後ろの太夫が「クロドメ」の言葉を大声で早口に唱えながら、カンダイで土上を指し封じ込めるような所作をする。威勢よくお囃子が鳴り出すと、ジャンギ・ナリゴ・カンダイを沸きに2回振り、正面で1回振る。と同時に左手の扇を額にかざしてお辞儀をし、これを3回繰り返す。

「見参」という太夫の挨拶である。

6 祝福芸

摺りはじめ、中の摺り、摺り納めの合間に行われる「松の舞」、「えびす舞」、「えんこえんこ」、「大黒舞」といったさまざまな祝福芸もまた、見るものの目を楽しませてくれる。

【えんこえんこ】

普通、少年三人によって踊られる。両手に銭太鼓を一個ずつ持ち、両手を伸ばし、歌に合わせて、左右の足を交互に斜め前に出す。また銭太鼓を、肩の高さに上げながら、くるっと1回転させる所作がある。ほぼ、このような所作を左右後を向いて反復し、再び前を向いて、同じ所作を繰り返して終わる。



【松の舞】

松の舞のお囃子に合わせて右手に、開いた扇を持った舞い手の少年が、両足を開いて、最初は扇を頭上にかざすようにして1回り、お囃子に合わせて♪松の舞ともはやせやい…と唱えると、一同答えるように反復斉唱する。

またお囃子に合わせて、両足で跳ねて大の字に静止したり、扇を耳元に上下させるような所作がある。



【えびす舞】

釣竿を持ったえびすが、鯛を釣る舞。お囃子に合わせて、寿ぐ祝い詞を舞いながら述べる。そしてめでたい鯛を釣りましようという意味のことを言う。周りはいっせいに「ヨウヨウ」と掛け声を入れる。そこで、舞台前に用意したタイを釣るわけだが、なかなか釣れない。釣れたかと思うと、すぐ外れてしまう。その腰ぶり身ぶりが

おかしく、見る人を笑わせる。

そうして2回ぐらい失敗したあと、ようやく釣り上げる。その釣り上げた鯛をその家の旦那様に差し上げましょうと、家内が豊かになるように福德の言葉をささげて終わる。

【大黒舞】

左手に打出の小槌、右手に扇を持ち交互にふりながら舞う。腰をかがめてまわる所作もある。



松の舞



大黒舞



恵比寿舞

えんぶり組の構成

親方：えんぶり組を指揮するのが親方といって「サイ」と呼ばれる白または五色の紙で作った采配（指揮棒）をもっている。

音頭とり：音頭とりの発声で「サイ」がゆるやかにふられ、唄とともにえぼしをかぶった太夫が動き出す。

旗持ち：えんぶり組は旗を先頭にして、摺り込み（入場）をする。旗の立てられたところを水口と見立てて、親方の指揮に従う。

唄：各えんぶり組により、歌詞は少し違うが長い間、口伝えだけに教えられたので切れ目もわからなくなったり、なまったりして聞き取りにくい、田の神様への呼びかけであり、神との語りでもあるので、お経のような神聖語なのである。

笛：横笛 6孔

太鼓：木の枠にはめ込んだ、大きさの違う2個の締め太鼓。

手平鉦：厚手の鉄板を円盤状にし、高音と低音がある。

太夫：馬の頭をかたどった「えぼし」をかぶるが、五色の厚紙がはられたたてかみには田の神様が降臨するといわれている。太夫は人と神と馬の三役を演じる。



サイ



えんぶり行事について

摺る

えんぶりでは、踊ることを摺るという。えんぶりのお囃子にあわせて、稲作のできるまでの流れを太夫が摺る。

奉納・行列の順番札

2月17日の朝、えんぶり組は八戸市長者山の新羅神社に集合し、到着順に番号札をもらう。1番札をもらうため、えんぶり組は前日から順番を競う。この番号札は、えんぶり行列の順番になっていて、行列が終わり次第、門付けに行くが、1番をもらった組と32番をもらった組とは、ご祝儀をいただく上で大きな意味を持っていた。

午前7時から奉納摺りを行ったあと、境内では観覧者・撮影者用に2組のえんぶり組が摺る。

えんぶり行列・一斉摺り

2月17日の10時に長者山を出発し中心街へ行列となって進み、商店街で一斉摺りが行われる。一斉摺りは、その年の参加えんぶり組（30数組）が、のろしを合図に一斉に摺るため、圧巻である。

御前えんぶり

もともとは、殿様の御城の御台所で摺る、当番のえんぶり組であった。現在は、市庁前で、南部家当主、八戸市長、観光協会会長等関係各位の臨席の前において、7組のえんぶり組が、年番制で交代で摺る。えんぶり組（重地、大久保、妙、八太郎、平内、妻ノ神、仲町）

えんぶり公演（有料）

八戸市公会堂のステージで行なわれる、えんぶりを約3時間じっくり鑑賞できる。

かがり火えんぶり

従来のえんぶりは、昼型の行事であったが、観覧者に夜も楽しんでもらおうと、かがり火の明かりを照らし、昼とはまたちがった幻想的な雰囲気の中で行なわれる。



えんぶり宿

えんぶり組には、それぞれ「えんぶり宿」という、練習や会合する家が、持ちまわりで決められていて、えんぶり期間中は神棚や床の間にえぼしを神様としてまつ。最近では、個人の家ではなく生活館や屯所が利用されている。

取締りえんぶり

明治初め～中頃、100組以上のえんぶり組が参加していた。もともと神事につながるえんぶりは、礼儀作法をかく守ることが要請されていたが、1組20人前後になる集団では、ちょっとしたことでも、めめごとや争いごとが多く、組同士のけんかもあったという。そのようなことから、えんぶり組を取締る組が決められた。腰に差した刀は、その名残である。

取締りえんぶり組（売市、中居林、糠塚、内丸、十一日町、横町）

「お庭えんぶり」について

かつては「だんな様」と呼ばれる大地主や有力商家などの土間や座敷を中心に芸として披露されることもあったえんぶりでしたが、明治以降の農地改革など時代の変遷に伴い、行列の後に町中で行事を祝う「門付け」という形に移り変わってきました。「お庭えんぶり」は昔の風情

を復活させようと、国の有形文化財の更上閣庭園で披露されることになったものです。

えぼし

太夫がかぶるえぼしは、馬の頭を表しているといわれている。タテカミにあたる部分には、五色の色紙が厚くはりならべられている。ここが田の神様のより代といわれている。

どうさいとながえんぶり

えんぶりには二つの型があり、古い型のながえんぶり（キロキロともいう）、新しい型のテンポの速いどうさいえんぶりである。えぼしの前にあたる部分に、長いふさのついたのがどうさい、それがないのが、ながえんぶりである。



どうさいえんぶり



ながえんぶり

演目

摺りこみ

太夫の先頭にいる藤九郎が、「えんぶり摺りの藤九郎が参りました…」と口上を述べて、太夫達が一列に輪になって登場する。



摺りはじめ

♪正月のお祝いに、松の葉を手にもちて～♪と唄いはじめ、苗代に種を蒔き、田を馬で耕すことを表す。



祝福芸

えんぶり摺りの合い間に、たくさんの舞いがはいて、見物をたいくつさせないようにしているが、組によって芸の種類がさまざまである。

えんこえんこ

金の成る木、笠づくしなどさつま節ともいわれる小唄に合わせて、銭太鼓と呼ぶ輪に銭がついた道具を両手に持って、まわしながら踊る。



松の舞

人も馬も疲れたので一休み。どぶろくを一杯飲んだ男がご機嫌になり、松の小枝を手にかざして♪一の枝に銭がなる。二の枝に金がなる…♪と踊ったのが、松の舞。



大黒舞

打ち出の小槌、扇を持っておめでたい口上や唄にあわせて舞う。



えびす舞

釣竿を持ったえびす様が、軽快な囃子にあわせて鯛を釣る。なかなか釣れず、えさをとられ、やっと釣り上げる滑稽な様子が見る人を笑わせる。



すだれ

特別なしかけのすだれを使って、囃子にあわせて口上を述べながらいろいろな形を作る。満月・宝船・稲穂など。



金輪きり

金輪を囃子にあわせていろいろな形を作ってみせる。笠の形、鶯の谷渡りなど。

